

## ぶんげい マスターピース工房 Vol. 3

### 「シェイクスピア・コンペ」参加企画 予備選考結果

#### ■ 選出企画 (あいうえお順。正式なタイトルは変更の可能性あり)

- ・ アンサンブル・レゾナンス (茨城県つくば市)  
『メメント・モリ』
- ・ M.M.S.T (神奈川県横浜市)  
『あるイングランド劇作家の眼差し』
- ・ グループ AKT・T (東京都調布市)  
『ヴェローナの二紳士～大正浪漫バージョン』
- ・ 劇団 GUMBO (兵庫県川西市)  
『マクベス・イン・ザ・ゴシップ』
- ・ てんこもり堂 (京都府京都市)  
『Jeanne』
- ・ ミクニヤナイハラプロジェクト (神奈川県横浜市)  
シェイクスピア作『アセンズのタイモン』に触発された作品

以上 6 件

#### ■ 概評

ハイレベルで活動力旺盛な舞台人からの応募が集まった。新進気鋭の若手劇団、名の通った中堅、某老舗劇団メンバーが組織するユニットなどから、全 13 企画。活動拠点は、京都府内を含む関西が 5 件、関東 7 件、九州 1 件。また代表者の年齢層で見ると、20 代が 3 人、30 代 6 人、40 代 4 人だった。

選考は、予備選考委員 3 人が魅力を感じた企画 8 件を中心に議論が繰り広げられ、最終的には厳選 6 件が「コンペ」参加企画として選出された。11 月の本番まで、さらに精度や密度を高めながら、シェイクスピアの新しい可能性を提示していただきたい。

この「マスターピース工房」の主眼は、古典作品を表面的になぞることではない。応募企画に求められるのは、作品・作家やその時代の思潮などを深く掘り下げ、見出した鉱脈を各自の演劇的感性で輝き豊かに研磨・整形し、現代の観客の鑑賞に堪える新たな演劇の可能性として提供するという、手間のかかる作業姿勢である。その掘り下げた深度や取り組み姿勢を企画書類に盛り込む技術も、ないがしろにはできない。そのため、知名度や日ごろの活動成果に優れた集団からの応募でも、残念ながら最終的には選出に至らなかったケースもあることを、付記しておきたい。

[文責：椋平淳]

## ■ 選出企画選評

### ◎ アンサンブル・レゾナンス

「アンサンブル・レゾナンス」の企画書には、取り上げる戯曲が具体的には示されていない。にもかかわらず、この劇団を推薦した理由は、何よりも『メメント・モリ』という題名にある。この中世ヨーロッパを支配した死の観念、それはルネッサンスにも受け継がれ、とりわけペストや度重なる戦争などで不安定な社会状況であったエリザベス朝下の文学作品に大きな影響を与えていることは周知の事実である。シェイクスピア戯曲にはこの観念が偏在している。現代社会に組み込み、日常の延長としてシェイクスピアを解釈する演出が多い中、そういった巨大なテーマにあえて取り組もうという姿勢を評価した。「メメント・モリ」をテーマに据えるのであれば、当然「四大悲劇」は網羅されるであろうし、喜劇、ロマンス劇、歴史劇に内在するグロテスク・リアリズムにも果敢に挑戦してもらいたい。シェイクスピアの多様で複雑な「死生観」をいかに描ききるのか、楽しみである。また、パフォーマンスで切り刻まれがちな現代シェイクスピア上演の趨勢に反し、せりふへと回帰しようとする試みも評価した要因である。

[文責：菊池あずさ]

### ◎ M.M.S.T

既視感—おそらくそれが、「M.M.S.T」の応募作品冒頭で観客が抱くものだろう。ここ 20 年ほどの間、社会の情報化が進展するなかで、情報機器やシステムが舞台作品に導入された例は枚挙にいとまがない。その利用が作品のテーマや味わいと有機的に関連しなければ、「安直な現代的アプローチ」というそしりを免れない。「M.M.S.T」の企画作品も、同じリスクを背負っている。

にもかかわらず選出された理由は、シェイクスピアについての分析・考察や情報化社会に対する批評的視点など、現代的アプローチを安直に終わらせない姿勢を一通り備えていると思われるからである。無論、オリジナリティも不可欠となる。その片鱗は、予定されているタイトル『あるイングランド劇作家の眼差し』に見出せるだろう。「舞台は世界を映す鏡」とハムレットは謳ったが、鏡があるだけでは世界は投影されない。「眼差し主体」が必要である。主体が向ける独自の視線によって初めて、ユニークな世界が現出する。はたして、「M.M.S.T」の眼差しはいかなる世界を立ち上げるのか。企画書に潜在する「眼力」が有効に発揮されるかどうか—「コンペ」本番の舞台は、それを間近で検証する場となる。

[文責：椋平淳]

### ◎ グループ AKT・T

「グループ AKT・T」を推薦した理由は、いくつかある。まず、非常にマイナー作品を扱っていること、次にそのマイナー作品を非常に分かりやすく解釈し、具現化しようという試みであること（おそらくシェイクスピアに初めて触れる観客にも楽しめるものであろう）、

第三に、演出プランが極めて詳細に呈示されていること、第四に俳優陣及びスタッフの経歴から、単に日本文化に置き換えたモダンで小洒落た上演ではなく、確かなテキスト解釈と演技力のもと上演をしてくれるであろうという信頼、最後（これが最も重要なのだが）、シェイクスピア作品に内在する「音楽性」が豊かに表現されるのではないかという期待、つまり「新たなシェイクスピア上演」への可能性が大いに示されているのである。日本のシェイクスピア上演史上にしっかりと痕跡を残してくれるであろう。

[文責：菊池あずさ]

### ◎ 劇団 GUMBO

このラインナップに「劇団 GUMBO」をそっと紛れ込ませるのは、とても楽しい。

驚かされたのはその経歴だ。シドニー、シンガポール、エジンバラ、アテネなどなど。一年に二回のペースで海外公演を行っている。いや海外でしかやってないのではないか？もはや日本の劇団と呼ぶ必要もないだろう。表現は客に育てられる。そのことに無自覚であろうと「街」がもっている現在の空気からのがれられないのが表現者だ。GUMBO の作品を見た時、久しぶりに異質なものを感じた。それはかつて「ヒトサライ」とか「コトリ」とか呼ばれた人々がもっていたであろう妖しく如何わしくもどこか寂しい感じだ。「街」をもたない彼らにしか持ち得ない旅人の佇まいが彼らにはある。

[文責：ごまのはえ]

### ◎ てんこもり堂

演出家の斬新な切口なる売り文句にあまり興味がない私には「てんこもり堂」のそっけない企画書が逆に頼もしく思えた。「コンペ」ではどうか審査員を混乱させるような作品を創ってもらいたい。演出家の斬新な切口なるモノサシとはまったく違う基準を彼らに示してもらいたい。「てんこもり堂」の魅力は役者だと思う。普通に上手い役者が一番報われない京都演劇界において、「てんこもり堂」のメンバーはたしかに報われない人たちだ。けれど彼らは真面目だから一日十一時間くらい稽古して発狂すればいい。いや発狂まではしなくていいが、近いところまで煮詰まって突き破って、普通に上手い役者なる汚名（僕が命名した）をすすいでもらいたい。

[文責：ごまのはえ]

### ◎ ミクニヤナイハラプロジェクト

ダンスや演劇の世界で名をはせる矢内原美邦が、『アセンズのタイモン』に触発された‘演劇的’作品を京都で手がける。その時点で、すでに「事件」ではないか。

本来の活動ジャンルでは、ダンスカンパニーの「ニブロール」として『ロミオとジュリエット』を素材とした作品を上演したことがある。また、宮沢章夫演出の例の『トーキョー／不在／ハムレット』では、演出補を担ったこともある。けれども、今回の素材は『タ

イモン』だ。タイトルロールが死ぬという「悲劇」の形式は踏まえつつも、その枠組みに収まりきらない不可解さゆえに、「問題劇」として扱われることもある‘問題’作だ。だとすれば、身体・言葉・音楽・衣装・映像などさまざまなメディアを交錯させながら一つの枠組みに収斂することを拒む矢内原表現の作品素材として、あまりに相応しいかもしれない。どんな「事件」を起こし、どんな「問題」を提起するのか？ 選出要因は、その期待感に尽きる。

[文責：椋平淳]

#### ■ 予備選考委員

ごまのはえ（劇作家・演出家、「ぶんげい マスターピース工房 Vol. 2」最優秀演出家）

菊池あずさ（シェイクスピア研究者、京都府立大学非常勤講師）

椋平 淳（財京都文化財団シアターアドバイザー、大阪工業大学教授）